

Title	有理函数ニツイテ
Author(s)	清水, 辰次郎
Citation	全国紙上数学談話会. 9 p.10-p.none
Issue Date	1934-08-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73863
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

26. 有理函数 = ツハテ

清水辰次郎 (阪大)

全有限平面テ meromorphic 函数 $f(z)$ = ツハテ.

$$A_1(x, f) = \frac{1}{\pi} \int_0^x \int_0^{2\pi} \frac{|f'(z)|}{(1+|f(z)|^2)^2} \rho d\rho d\theta, \quad z = \rho e^{i\theta}.$$

トオケハ

$$\int_{\varepsilon}^x \frac{A_1(t, f)}{t} dt = T(x, f) + O(1)$$

テアル。コハ = $T(x, f)$ ハ R -Nevanlinna カ有理型函数ノ理論ニ導
 入シタ函数テアル。筆者ハ数学輯報 1929, 第6巻, 第1号 129頁テ
 $f(z)$ カ有理函数トラハ $A_1(x, f)$ カ有界トナリ, 逆ニ $A_1(x, f)$ カ有界トラハ $f(z)$
 カ有理函数トナレコトヲ示シタ。コハ $T(x, f) = O(\log x)$ カ有理函数
 テアルタメニ必要且十分タト云フ Nevanlinna, 定理ヨリ直ク出ルタカ。
 有理函数ニ対シテハ $A_1(x, f)$ ノ方カ $T(x, f)$ ヨリ簡單ノ意味ヲモツテサ
 ルタカ。直接ニ $A_1(x, f)$ ノ性質ヲ使ッテ証明スルノ順序ダト思ハレ。

$f(z) = \frac{P_1(z)}{P_2(z)}$, ($P_1(z), P_2(z)$ ハ有理整函数) トオケハ

$$A_1(x, f) = \frac{1}{\pi} \int_0^x \int_0^{2\pi} \frac{|P_1' P_2 - P_1 P_2'|^2}{(|P_1|^2 + |P_2|^2)^2} \rho d\rho d\theta \leq \frac{1}{\pi} \int_0^x \int_0^{2\pi} 11 \rho d\rho d\theta + \frac{1}{\pi} \int_{x_0}^x \int_0^{2\pi} \frac{K}{\rho^4} \rho d\rho d\theta$$

$z = \rho e^{i\theta}$

コハ = K, x_0 ハ十分大キイ常数テアル。何者、 $P_1(z), P_2(z)$ ノ次数ヲ夫々 n_1, n_2
 トスレハ $n_1 \neq n_2$ ナルトキハ明カニ $P_1' P_2 - P_1 P_2'$ ノ次数ハ $|P_1|^2 + |P_2|^2$ ノ
 次数ヨリ^{少クモ}低ク、 $n_1 = n_2$ ナルトキモ $P_1' P_2 - P_1 P_2'$ ノ最高ニ^{少クモ}低イ。ヨツテ x_0, K ヲ十分大キク^{少クモ}トツテオケハ^{少クモ}ヨイ。コレヨリ

$$A_1(x, f) = O(1)$$

$n(z) = A_1(z, f)$ が有界なら $f(z)$ は有理函数で $f(z) = \frac{p(z)}{q(z)}$ と表わすことが出来る。仮定より $f(z)$ が有理函数で $f(z) \rightarrow \infty$ となる点 z_0 は孤立点である。特異点 z_0 があるから $f(z)$ が領域 D の領域 $D_0 = D \setminus \{z_0\}$ 上で定義される性質を用いて Weierstrass の定理から、適当な $\alpha_0 \neq \infty$ に対して $f(z) = \alpha_0$ となる点 z_0 は無限に多くある。根 z_0 は $z_0 = \alpha_0$ である。 (例へば、竹内正樹先生：岩波講座、橋田函数論 IV, 163-165 頁)。モットモ上 z_0 は Poincaré の定理から直ぐに得られる。 $f(z)$ が成る可なり初等的な証明は $f(z)$ に対して Weierstrass の定理を用いて $f(z) = \alpha_0$ となる点 z_0 がある。

したがって、一方、任意の $\alpha (\neq \infty)$ に対して $L_\alpha(f) = \frac{|\alpha|^2 f + \alpha}{|\alpha| (f - \alpha)}$ とおけば

$$\frac{|dL_\alpha(f)|}{1 + |L_\alpha(f)|^2} = \frac{|\alpha|^2 (1 + |\alpha|^2) |df|}{|\alpha|^2 |f - \alpha|^2 + |\alpha|^2 |f + \alpha|^2}$$

$$|\alpha|^2 |f - \alpha|^2 + |\alpha|^2 |f + \alpha|^2 = |\alpha|^2 (f - \alpha)(\bar{f} - \bar{\alpha}) + (|\alpha|^2 f + \alpha)(|\alpha|^2 \bar{f} + \bar{\alpha})$$

$$= |\alpha|^2 (1 + |\alpha|^2) (1 + |f|^2)$$

であるから

$$\frac{|dL_\alpha(f)|}{1 + |L_\alpha(f)|^2} = \frac{|df|}{1 + |f|^2} \quad \therefore A_1(z, L_\alpha(f)) = A_1(z, f)$$

(実は、 L_α は Riemann sphere 上で $z \mapsto \alpha$ を相対する点 ∞ を相対する点 ∞ と映す。球自身、回転である)

よって筆者、前掲論文 123 頁 Theorem I より

$$A_1(z, f) = A_1(z, L_\alpha(f)) = \frac{1}{4\pi} \int_0^{2\pi} \frac{\partial \log(1 + |L_\alpha(f)|^2)}{\partial \bar{z}} r d\theta + n(z, \alpha)$$

$A_1(z, f)$ は beschränkt であるから、 $\exists K > 0$ ($A_1(z, f) \leq K$)

$$\int_{R_0}^R (K - n(z, \alpha)) d \log r \geq \left[\frac{1}{4\pi} \int_0^{2\pi} \log(1 + |L_\alpha(f)|^2) d\theta \right]_{r=R_0}^{r=R} - \left[\dots \right]_{r=R_0}$$

右辺の第一項は ≥ 0 であるから

$$\int_{R_0}^R (K - n(z, \alpha)) d \log r \geq C(f, \alpha, R_0)$$

$C(f, \alpha, R_0)$ は f, α, R_0 に依存する定数。ここで $\alpha = \alpha_0$ とおけば矛盾が生じる。 $n(z, \alpha) \rightarrow \infty$ となる